

が表れている。」「自己評価に取り組むことで、各教職員も施設全体の業務内容を俯瞰して把握する機会となっており、自己評価が施設運営にとって意味あることと意識できるようになっている」等のご意見を頂きました。この場で意見がなかった分野等で意見や感想を頂く為に「学校関係者評価表」をお渡しし、一週間後締め切りで依頼しました。評価表にも肯定的な意見を多く頂きました。

今回の自己評価は、精査後とはいえ項目が多すぎて、委員の皆様にご自己評価内容及び園の保育内容を十分にお伝えしきれない面もありましたが、今後の課題として検討を重ねていきたいと思っております。



第三回学校評価委員会（2月6日）

平成21年度文部科学省・幼児教育の改善・充実調査研究事業「幼保連携型認定こども園における学校評価の在り方について」の発表会を行い、学校関係者委員会の皆さまも参加して頂きました。また、パネルディスカッション「学校評価のあり方について」（学校評価を行うことで得られるものは何か？）では、学校評価委員の南魚沼市教育員会指導主事腰越先生にパネラーとして貴重な意見を頂きました。

内容については、3 研究結果の公表（発表会の日程・内容）の通りです。

2 公表シート

I 評価項目の達成および取組状況

評価項目	取組状況
I 保育の計画性	・保育者一人ひとりが、指導計画の中で定着していること(異年齢児交流やスキー教室、高齢者施設との交流など)の重要性を再確認し、さらに活かしていこうと心がけるようになった
II 保育の在り方・幼児への対応	・新型インフルエンザの流行もあり、各保育者は視診・検温・発熱者の隔離・保護者への連絡等、かなりきめ細かく対応できるようになった
IV 保護者への対応・守秘義務	・認定こども園となり、幼稚園・保育園両方の保護者・子どもがいるが、いずれも分け隔てなく接し、個々のニーズに真摯にこたえようとしているので、今後も大切にしたい
VII 保育の在り方・3歳未満児への対応	・自己評価を実施したことで、3歳未満児に対する基本的な生活習慣への配慮は、個々に合わせて丁寧に行うことが出来ており、これからも大切にしようと再確認することが出来た

Ⅱ 学校評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果

① 自己評価項目・指標等の検討と評価実施体制の構築

幼稚園機能と保育園機能を一体化して運営する認定こども園としての自己評価を作成するために、幼稚園教諭の自己評価を基にして、保育士の自己評価の項目をすり合わせ、重なる内容・わかりにくい文言を削除整理した。子育て支援の項目・3歳未満児への配慮については特に重要なので、大項目として作成した。また、指導的立場に立つ者と現場の保育者とは、おのずから視点が異なってくるため、それぞれの立場を明確にするために各項目毎に2つのシートを作成した。

多岐にわたる業務内容を確認しようとする、膨大な項目数になってしまう。通常業務の中で、継続して取り組める自己評価にするためには、項目を整理して簡易にすることが必要であった。全教職員による自己評価の実施及びその結果を通して評価項目を再編成したので、各人1回目と2回目の項目の変更点を意識して文言を読むことになった。保育に携わる者以外の職種（栄養士・事務等）は記入できない項目もあるが、一通り目を通すことで、認定こども園に何が求められているのか、保育者は何を大切にしているのか知る機会となった。

具体的な例を記入する欄を作ったことで、改めて日常の保育の中で、何が重要なか・本来どうあるべきなのか考えることにもつながった。そのことが保育者自身の自信へもつながり、保育の向上へとつながった。

持ち出し書類の確認ファイル等に代表されるように、この自己評価を通じて、様式等の不備に気づき、作成したものもある。形を整えることは面倒なようだが、その事柄の重要性をそのつど再確認することにもなり、結果として各自の意識が向上し、自己評価もよい結果となった。

単に自己評価をするだけでは、向上へはつながらず、それを基にいかに共通理解をはかるかが重要であることも確認することができた。今回、最後にグループディスカッションを実施したことで、認定こども園の目的を大切にしながら、互いに高めあおうという共通理解をもてた。

保育の在り方・子どもへの対応・保護者への対応については、簡単に評価しきれるものではなく、課題として残った。しかし、保育の質を向上させたいという共通理解を、全職員で持つことができたのは大きな収穫であったと考える。

認定こども園開園から2年目となり、この地域の認定こども園として、幼稚園機能と保育園機能を一体的に運営する方向が定まりつつある。この時期に、認定こども園のありようについて評価するための評価項目・指標等について確認する機会をもてたことは、園の貴重な財産となった。利用する保護者や子どもの状況が多様であることや、地域の子育て支援事業の実施などを、認定こども園の目的や特徴を踏まえつつ検討したことで、認定こども園として求められていることを再確認することができた。

今後も、定期的かつ組織的に自己評価を継続していきたい。

② 客観性を高めるための学校関係者評価の実施

自己評価の客観性を高めるために学校関係者委員会を組織し、学校関係者評価を行った。第1回は、学校関係者評価委員会の役割や認定こども園の教育内容及び昨年度の結果について説明を行った。第2回は、自己評価の結果について説明を受けた後、委員会メンバーから意見を頂くこととした。学校関係者評価委員には、当市教育委員会管理指導主事・近隣小学校長・主任児童委員・当園 OB・PTA 会長に就任して頂いた。

Ⅲ これから改善したいこと

評価項目	具体的な取組状況
I 保育の計画性	・ 日常の保育の中で、担任・副担任間で互いの保育を見せ合い、主任・総括主任は各クラスの保育内容を確認・指導する機会は多いので毎日の振り返りを大切にしたい
II 保育の在り方・幼児への対応	・ 職員会議などの機会を生かし、指導的立場から各保育者の良い所に気づかせ、保育者同士が互いに気づきあえるような力を育てていきたい
IV 保護者への対応・守秘義務	・ 書類の管理は書式を作ることで出来るようになったが、電子データについては不十分な点もあるので管理方法を検討し、自己評価などを通して各自の自覚を促すことも続けていきたい
IV 保育の在り方・3歳未満児への対応	・ 子どもの働きかけについては、職員会議や個人月案会議などの機会に一人ひとりの子どもへの配慮事項について話し合うようにしているが、会議時間などの時間を有効に活用する必要性を感じた

Ⅳ 学校関係者の評価

<p>・ 評価が施設運営にとって意味あることであることを、各教職員が意識できたことが伝わる取り組みであった。</p> <p>・ 評価項目(大項目)の設定については、幼稚園教育要領・保育所保育指針を中核に置き、地域の特徴および認定こども園金城幼稚園金城保育園のこれまでの経緯を元に設定されたものであり、適当かと思われる。</p> <p>・ 中・小項目については、これまでの項目の設定と評価の実務を通じて改善を加え、取捨選択してきたのだからどれも必要不可欠の項目と思う。しかし、評価は可能な限り簡潔にしたほうが現実的であるので、今後評価を継続する中で、さらに簡素化できると良いのではないか。</p> <p>・ 保育者は教育課程等中心に目が行きがちだが、全項目をチェックすることで、園全体の運営を俯瞰してみる経験ができています。立場別にシートを作成したことで、各自の役割についても理解することができました。</p> <p>・ 一部のものが評価するのではなく、全職員による協同体制で取り組み、重点項目を決めてグループディスカッションしたことは、とてもよい方法であった。また、具体例をもとに話し合うことで、各自の理解が深まっている。</p> <p>・ 保護者の立場からも、自己評価への取り組みを通じて、教職員の意識向上が図られていると感じた。教職員間の縦と横の関係を再確認する機会となり、意識改革ができたと思うので、負担にならない程度に自己評価は継続して、これからもよりよい園であってほしい。</p> <p>・ 学校関係者からみると、これだけの作業にかかわった教職員は、幼稚園・保育園の在り方、研修の重要性、それぞれの専門分野の中での自己の役割等に気づき、十分に力量を高めることが出来たのではないかと思う。自己評価結果は比較的厳しいものとなっているが、教職員の自己の職務への要求度が高いことの表れと感じる。</p> <p>・ PDCA サイクルは一般的に言われている重要な流れであるが、現実には評価の段階で停滞してしまい、改善に結びつかないのが一般的である。この評価に膨大なエネルギーを割いて取り組んだ研究と発表には敬意を評する。ぜひ成功させ、PDCA の見本を示して欲しい。</p>
